



月次祭 4月17日(木) 午前10時～
婦人会例会 4月9日(水) 午前10時～



3月19日の祭典の日の朝、雪景色に驚きました。周辺の早咲きの桜の便りが届く頃に雪景色は珍しい。祭典の日の雪景色で思い出されるのは、30年前の就任奉告祭の朝、2月18日でしたが、近畿は大雪で、近隣の方だけしか来れないというアクシデントのなか、前大教会長は天理から法隆寺まで自動車で移動してそこから電車で単身来られたことを思い出します。到着されて一言、久しぶりに電車で来させてもらえた。良かった。と、よく考えてみると最近では車で移動することが多く、乗り換えをしながら時間をかけて天理へ帰参することが減ったように思います。ましてや、初代の方たちは徒歩

で帰参していた。もっともそれが普通だったのですから当時としては格別とんでも無いことではなく当たり前のこと。今、車で帰参することと変わらないのです。おちばへ帰って神様、おやさまに御礼を申し上げることが出来る。その心が大事なのでしょう。古の苦勞を知ることは大事ですから徒歩で帰参することを経験することは大切なのですが、その当時はそれが当たり前だったことも忘れてはいけないことだと思います。神様は苦行・修行することを進めてはいません。借りている身体に苦痛を加える行為を貸主である神様が見たとき喜ばれるとは思えないのです。ただ、こうして安心して与えられた道具である車や電車などを使えることに感謝して帰参することの方がきっと喜ばれるのだと思います。

3月26日の本部月次祭以降は、神苑周辺は桜が次々と咲く華やかな季節となります。毎日の健康と様々なご守護に感謝しておちばに帰って御礼を申し上げるとともに、桜を愛でて陽気遊山を楽しみましょう。



教祖誕生祭

寛政10年(1798年)4月18日にお生まれになった、教祖(おやさま)のご誕生をお祝いして勤められます。

祭典 2025年4月18日(金)10:00 天理教教会本部
よろこびの大合唱

2025年4月18日(金) 誕生祭祭典終了直後

場所 本部中庭 婦人会・青年会・少年会主催

今日の
おやのことは



「心改めたら苦勞あろうまい」

又しても苦勞は、心で苦勞して居たのや。

楽しみ、心改めたら苦勞あろうまい。

陽氣遊びと言うたる。

おさしづ 明治28年5月31日

世の中には、いつも「苦勞」の絶えない人がいます。一難去ってまた一難、一つの問題が解決したと思ったら、また次のことが気に掛かる。いったい、いつになったらゆっくりできるのでしょうか。

そろそろ卒業と入学のシーズンがやって来ますが、この季節はまた、転勤や人事異動の多い時期でもあります。新しい人々に出会い、新しい環境に慣れる努力をする。ようやく落ち着いてくると、今度は職場や地域のこと、家族や友人との人間関係といった、これまで気が付かなかったようなことが、心配になってきます。苦勞の絶えない毎日ですが、この「苦勞」の源は、どこにあるのでしょうか？

「又しても苦勞は、心で苦勞して居たのや。楽しみ、心改めたら苦勞あろうまい」

このお言葉を心におさめて、もう一度周囲を見回してみましよう。新しい人との出会いや環境の変化は、本当につらいことでしょうか。仕事に満足できないのは、なぜなのでしょう。成長した子供は、そんなに変わってしまったのですか。目を凝らして、もっとよく見てほしい。

見えている世界ではなく、見ている自分を変えない限り、「苦勞」が無くなることはありません。人との出会いや環境の変化、年齢を重ねて成長するといったことは、言葉を換えれば、「生きる」ということでもあるからです。

それでは、「生きる」ことを楽しむためには、どうすればよいのでしょうか。このお言葉の後には、「分かったら、日々飲んだり着たり、いつ／＼まで楽しみ」とあります。教祖を通して伝えられた親神様のメッセージには、このような生き方を可能にするヒントがあふれています。そのことを忘れないでください。(岡)

教長腦の芯痛むに付身上願 明治二十八年五月三十一日夜十時頃

さあ／＼事情尋ねる／＼処、さあ／＼事情尋ねる。心というは余儀無く心であろう／＼。身の処切なみ一つ事情今日はどうであろう、又明日どうであろう。

日々思う処／＼、又一時どう、日々であろう／＼。よう／＼一つ理それ／＼所にては皆取り決まり、談示一つほんにそうやなげにやなろうまい。一つでなろうまい。一つ諭すによって、よう聞き分け治めてくれ。

身上切なみいつ／＼までにはなろうまい。これまでちゃんと済んである。

身の内切なみ無げにや楽しみ諭す／＼。神一条実と取りて治めてみよ。

又しても苦勞は、心で苦勞して居たのや。楽しみ、心改めたら苦勞あろうまい。

陽氣遊びと言うたる。陽氣遊びというは、心で思たりして居た分にや、陽氣遊びとは言えまい。これから心に悔しみありては、陽氣ぐらしどころやない。

早くにこれだけ分かったこっちゃ。分かったら、日々飲んだり着たり、いつ／＼まで楽しみ。これ一つ聞き分け。一時早く諭してくれにやならんで。

月日には人間はじめかけたのは

陽氣遊山がみたいゆえから おふでさき 第14号 25

神様は、はるか昔、約9億10万年前に、

「人間が陽氣ぐらしするのを見て、共に楽しみたい」と思われて人間創造を始められたと、私たちは聞かせてもらっています

では？「陽氣ぐらし」とは、何なのでしょう？



天理教の三原典では、このように表現されています

みかぐらうた 「極楽」 「陽気づくめ」
おふでさき 「陽気づくめ」 「陽気遊山」
おさしづ 「陽気あそび」「陽気ぐらし」「陽気遊山」

陽気
遊び

この中で、一番多いお言葉は、おさしづの中に出てくる「陽気あそび」です。ですから、この世で人間が陽気に遊ぶ姿が見たい、と言うのが神様の思いに一番近いのかも知れません。

ただし、人間創造の目的において、はっきりと表現されているのが、おふでさきの 14 号 25 のお歌に出てくる「陽気遊山」というお言葉です

遊山とは、元々は仏教用語で、悟りを開き、桃源郷のような場所で暮らす、という意味らしいですが、一般的には、物見遊山と言われるように、外に遊ぶに出る、旅行や観光に行く、という意味で使われます

「陽気あそび」という、お言葉と合わせて考えると、積極的に、この世で楽しく生きる。という意味になるのではないのでしょうか？

観光や旅行は、楽しいものです。日常では、味わえない刺激的な経験ができます。

ただし、外に遊びに出るということは、自分のわがままの効くテリトリーから出て、遊び場のルールに従い、見ず知らずの人の言うことを聞き、時には遠慮し、たすけあうことも必要です。

遊山の意味を、文字通り解釈し、山で遊ぶというように取ったならば、自分の思い通りにしたいという欲望を抑えて、時には、不自由を受け入れて、周りとなすけあいをしなければ、楽しむことは出来ません。周りの言うことを聞かずに、欲望のままに行動すれば、遭難をして命も落としかねない。それが山で遊ぶということだと思います。

また、山を楽しむには、与えられたものだけで喜んでいては、本当の楽しさや遊びは生まれません。不自由の中から、いろいろとアイデアを出して、創意工夫する、創造力が必要です。即ち、天理教のキャンプでも掲げているテーマ、「たすけあいと創造」が必要です

天理教では「陽気ぐらし」のキーワードとして、「感謝・慎み・たすけあい」を掲げていますが、このワードの他に、「創造」を足すと、より神様の求められている、積極的に、この世を楽しむ「陽気遊山」を味わうことが出来るのではないのでしょうか？

87.人が好くから

教祖は、かねてから飯降伊蔵に、早くお屋敷へ帰るよう仰せ下されていたが、当時子供が三人ある上、将来の事を思うと、いろいろ案じられるので、なかなか踏み切れずにいた。

ところが、やがて二女のマサエは眼病、一人息子の政甚は俄に口がきけなくなるというお障りを頂いたので、母親のおさとが教祖にお目にかからせて頂き、「一日も早く帰らせて頂きたいのですが、何分にも樺本の人たちが親切にしてくださいますので、それを振り切るわけにもいかず、お言葉を心にかけてながらも、「一日送りに日を過ごしているような始末でございます。」と申し上げると、



教祖は、「人が好くから神も好くのやで。人が惜しがる間は神も惜しがる。人が好く間は神も楽しみや。」と、仰せ下された。

おさとは重ねて、「何分子供も小そうございますから、大きくなるまでお待ち下さいませ。」と申し上げると、教祖は、「子供があるので楽しみや。親ばかりでは楽しみがない。早う帰って来いや。」と仰せ下されたので、おさとは、「きっと帰らせて頂きます。」とお誓い申し上げて帰宅すると、二人の子供は、鮮やかに御守護を頂いていた。かくて、おさとは、夫の伊蔵に先立ち、お助け頂いた二人の子供を連れて、明治14年9月からお屋敷に住まわせて頂く事となった。

★ 南河内支部ひのきしん会場
令和7年4月29日(火・祝) 9時～

- ※ 粟ヶ池共園(富田林市民会館東側公園)
- ※ こんごう福祉センター(旧金剛コロニー)



☆ 雨天 中止
各会場には駐車場があります。数に限りがありますので、できるだけ乗り合わせてご参加ください

受付 8時30分 開始 9時 終了 12時

ひのきしん内容 除草・掃除

持ち物 : 軍手、タオル、帽子、鎌など
〔草刈り機は使えません、持参はご遠慮ください〕

...

ウサギとカメ

先日、支部内に居られるようぼくの方へのひのきしんデーの案内チラシを印刷しました。

教区から配布され用紙は 800 枚。名簿委員会で名簿を精査してもらい家族ごとのまとめた結果、南河内支部管内以外の教会に所属するようぼく家庭は約 770 件。教区配布分では、支部管内の教会のようぼくの分が足りませんから、教区からのちらしに似たものを作成して配布することにしました。管内教会数は 59 教会。各教会に 10 枚として 590 枚。布教所にも配布する必要がありますので併せて 700 枚としました。

配布する内容は、全教一斉ひのきしんデーとようぼく一斉活動日の案内。それに併せて、支部内での活動一覧と布教部の活動としての 1000 日神名流しや陽気ぐらし講座などの紹介を両面に印刷して、支部外教会所属のようぼく家庭には郵送で、管内教会には配布物として配布します。年 1 回の郵送ですが、転居や代替わりのため返送されてくる物が多数あります。

さて、各チラシは片面ごとに作成したので、印刷は片面印刷して、もう一度裏に印刷するのですが、この月報は、最初から両面印刷しているので 1 枚の印刷には少し時間がかかるのですがほとんど紙詰まりすること無く印刷しています。

今回、印刷枚数が 800 枚とか 700 枚ですので、滅多に使わないレーザープリンタを使って印刷しました。片面だけの印刷は普段使っているインクジェットの数倍の早さで鮮明に印刷してくれます。素晴らしい！と感動していました。

しかし、裏面に印刷をし始めると、少し厚みのある用紙の時は少し手間取りながらもインクジェットより速い速度で印刷していたのですが、普通の用紙の厚みになると、紙はつまると、用紙があるのに用紙を挿入できないことから用紙がないとエラーになるので、用紙トレイを引出して閉めてを繰り返す有様。あの素晴らしい早さは陰もありません。

時間がかかるのを承知の上、インクジェットプリンタで印刷をすると、確かにレーザープリンタの画期的な速度はないのですが、确实の裏面にも印刷してってくれる。

結果的には、スピードより确实性が勝ったということになりました。

ただし、片面印刷に於いては、レーザーも詰まることなく高速ですので、得意不得意、適材適所に道具は使う必要があるともいえます。用木(人)とは、すべて同じではない様々な特性を持っているのです。自分の価値観だけで決めつけるのではなく、その特性を見極めて活かせるように心がけていきたいですね。

